

北方圏国際シンポジウムに参加した感想と今後の抱負

北海道大学環境科学院 修士課程 1年
杉田 友華

南極で研究・観測を行う南極地域観測隊が、南半球の冬至に催す「ミッドウィンター祭」というイベントがあります。私はこの祝祭を研究テーマとして、観測隊員へのインタビュー調査をもとに、祝祭に対する認識の変化とその背景にある社会の変容を明らかにしたいと考えています。しかし、こうした特殊なテーマが「社会に役立つ成果を得られるのか」という問いに対し、明確に答えられない自分にやるせなさを感じてきました。そんな迷いの中で参加した「北方圏国際シンポジウム」で、この思いに変化がありました。

私は、これまで学会や研究会に参加したことがなく、今回のシンポジウムが学外の研究者と交流する初めての経験でした。スイス氷河実習の紹介に加えて自分の研究を英語で発表する機会をいただきましたが、どれだけの人に興味を持ってもらえるか不安を抱いていました。ところが、会場には専門分野や世代を超えて北方圏に関わる研究者が集い、多様な研究を寛容に受け止める温かな雰囲気がありました。発表後には道立オホーツク流氷科学センター所長の高橋修平さんをはじめ、北極域研究センターのユハ・サウナワラさん、兒玉裕二さん、JAMSTECの木村元さんといった、豊富な知見をお持ちの先生方から多角的な助言をいただきました。高橋さんは翌日、ご自身の越冬経験や極地探検史について約2時間も語ってください、閉会式後には高橋さんが「あなたの発表が一番面白かった」と声をかけてくださいました。こうした先生方の熱意に触れ、私は自分が抱えていた「見えない到達点への不安」や「成果への焦り」が、研究の不確実性を恐れるがゆえの迷いだったのだと整理することができました。

私はこれまで「即時的な有益性」を出すことに囚われ、自分の研究の価値を自ら狭めていたのかもしれませんが、しかし、本来研究は好奇心に突き動かされるもの。科学に有益性だけを求めるより、「基礎研究」という文化的な行いと捉えても良いのではないかと考えるようになりました。地域とともに歩み40回目を迎えたこのシンポジウムで、同じ極地の人文社会科学に携わる方々、即時的な成果でなくても興味を持ってくださった方々に出会えたことは、何よりの励みになりました。修士課程残り一年、自分が抱いた問いを手放さず、コツコツ取り組んでみます。いつか私の研究が、当たり前だと思っていた社会のあり方や他者との関わりを、新たな角度から捉え直すきっかけを与えることができればと思っています。



図 1：流氷科学センターで見た南極の展示



図 2：スイス氷河実習メンバーの発表